

生 活 文 化 論 考 II

茶と生活文化(1)

原 田 佳 子

A Study of Culture and Life II

Tea as Culture and Life (1)

Yoshiko HARADA

Abstract

We can't think about Japanese Culture of the present or the past without the tea-culture. Our life is involved with tea very much. The tea-culture affects our artistic feeling for the forms of things which we use in our daily life, or our actions, and our thinking or state of mind.

The tea-culture means not only the drinking of tea, but includes manners, the idea of MICHI (way of life) and various mental aspects, and it provides a pleasant humanity in our lives. Here it is attempted to analyze the artistic feeling of tea, which is based on the history of tea ceremony, and about the aspects of our life which it formed.

However, it is better first to make clear details about the tea plant, the usefulness of drinking tea, and the history of tea ceremony, just as a formula must be made clear before an experiment is performed.

This paper describes the tea plant, its practical and medical usefulness, and the cultural usefulness toward accomplishments and good taste.

It also explains the history of tea ceremony, also including the above aspects.

Finally the meaning of "things cultural" will be discussed, analysing it's relationship to the artistic feeling of tea and the forms of things of our life or the Japanese way of life in next paper.

I 緒 言

過去・現在にわたって、日本の文化を考える時、茶の文化を切り離して考えることはできない。我々の生活と茶は勿論、生活文化と茶がいかに密接に関わり合っているか、ほとんど測り

知れないほどである。我々が意識しているかどうかは別として、日本人の日常生活における造形上の、また行動上の美意識から、思考や精神性まで、我々の生活に茶の文化は大きな影響を及ぼしているのである。

単なる「喫茶」ではなく、「茶礼」を伴い、中世的な「道」の理念や精神性が加わって、「もの文化」として発展した茶道は、もはや単なる芸道ではなく、衣食住を中心とした我々の日常生活を、それこそ「もの」と「心」の両面にわたって豊かにしてくれている。「もの文化」とは、生活の便利さ、快適さ、人間らしさである、と言った¹⁾。ものは確かに物質であるが、「もの文化」は、ものを単なるもので終わらせない、人知、教養、精神的なものを含んでいる。茶道における所作、道具などは、まさに物質的精神的なものを含んだ「もの文化」の表われと見ることができよう。

具体的に言えば、茶道における茶室、露地、床飾り、茶道具、茶菓子、会席料理、礼式作法等々は、今尚我々の生活文化に大きな影響を及ぼしている。茶室の趣向、露地の飛石や筧（かけひ）は、現代の日本家屋や庭に生きており、茶席の床飾りや茶道具は我々の生活に伝承され、趣味豊かな潤いを与えている。茶菓子から今日の多種多様な和菓子が生まれ、茶会席料理を母体として、季節をもちこみ持ち味を生かした京料理が発展したことはよく知られている。珠光、紹鷗、利休、織部、遠州をはじめとする茶人の好み、美意識が、現代人の衣食住にわたって、さながら地下水のように脈々と伝わっていると言っても過言ではなからう。

このように、茶の文化はいろいろな意味で日本人の生活に深く浸透し、他の国にはない文化現象を生んでいる。わび、さびの美の造形や理念から、一期一会や一座建立などの精神に至るまで、我々の日常生活に影響を与えており、茶道はもっとも日本的な総合文化であると言われるのが頷けるのである。

そこで、本稿ではまず茶の湯の歴史をたどり、茶道とは何かを明らかにし、それを踏まえて茶道大成の課程の中で形成され、今日尚我々の生活文化を支える美的造形と精神について考察したい。その上で茶の美意識と具体的な生活造形との関係、茶の心と生活行動との関係などについて論じてみたいと思う。それはまさに茶の湯における物質的、精神的な「もの文化」を明らかにすることであり、また、我々の生活文化を明らかにする手懸りとなるであろう。

1) 広島女学院大学論集 通巻37集の「生活文化論考Ⅰ——(6)生活文化の意味」(原田佳子著) 参照。

Ⅱ 茶と茶の効用

1. 茶

茶の湯の歴史をたどるに当たって、喫茶の原点とも言うべき茶と茶の効用について明らかにしておく必要がある。

まず茶の木についてであるが、茶はツバキ科の常緑樹である。温帯から熱帯にかけて生育し、葉の表が堅く光る攄（かし）、椎（しい）などと同じ照葉樹の一種という。茶祖、陸羽の「茶経」の冒頭に、「茶ハ南方ノ嘉木也……」とある。原産地は東アジアで、インド東北部のアッサムから中国の雲南、四川にわたる山岳、丘陵地帯がその一つと言われる²⁾。気候温暖、多雨地帯の排水のよい台地や丘陵地が最も生育に適し、生命力の強い植物である。わが国では新潟県が栽培の北限とされ、埼玉（狭山茶）、神奈川（足柄茶）、静岡（本山茶）、京都（宇治茶）、福岡（八女茶）、佐賀（嬉野茶）等々、日本列島の各地に茶の名産地がある。茶は植物学上、シナ種、シナ大葉種、インドアッサム種、シャン種の四種に分けられるが、日本で栽培されているのは、低木性の葉が小さく葉身こわく濃緑色のシナ種で、栽取栽培に便利のように60～90 cmの高さに仕立てられている。

さて一口に茶と言っても、製造法の違いによって次の三つがあり、茶道における茶は①の緑茶である。①不発酵茶（茶の葉を加熱して酸化を止め、発酵させない「緑茶」）②発酵茶（茶の葉を酸化発酵させ、乾燥する「紅茶」）③半発酵茶（茶の葉を半分酸化発酵させ、乾燥する「ウーロン茶」）。さらに緑茶は、蒸籠で蒸して乾燥させながらもむく日本茶と、熱した釜で炒るく中国茶に分けられる。言うまでもなく茶は茶の若芽を摘んで製造されるが、日本茶の製造時期は立春から数えて八十八夜前後の4月下旬から5月上旬と、6～7月及び8月で、各々一番茶、二番茶、三番茶と呼ばれる。二番茶、三番茶になるほど、甘味、香味が減じ、渋味が増加してくる。また更に、被覆茶といい茶摘み時期より20日位前から茶に日覆いをかけ、日照を和らげて甘味の多い玉露や抹茶を作る。露天の茶の若芽からは煎茶、番茶、茶の葉を加熱し香りをもたせた焙茶（ほうじちゃ）などを作る。

ところで、わが国には平安時代の初め頃から、人手によって栽培される茶園の茶の他に、今日でも山間僻地に野生する山茶（ヤマチャ）が見られる。この山茶は古くから日本列島に自生していたとする「自生説」と、大陸から伝えられたとする「伝來說」がある。これは今なお定説を見ないのであるが、問題は、喫茶の風習が大陸から伝来する以前に、日本で茶が飲まれた

2) 雲南を中心とする照葉樹林地域を「東亜半月弧」と称し、茶の木の原産地という。——中尾佐助他著「続・照葉樹林文化」

かどうかであり、より重要な問題は何時頃からわが国で茶が飲みはじめられたのか、何故茶を飲むのか、茶の効用は何かであると思う。そこで、次に茶の効用について、明らかにしておきたい。

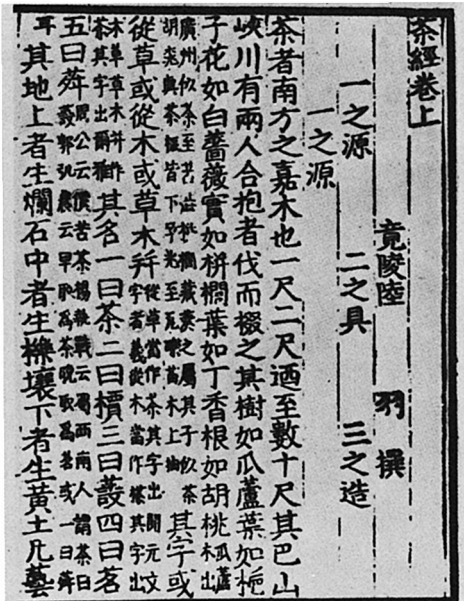
2. 茶の効用

中国は勿論、世界最古の茶書、唐代の764年頃に著わされた「茶経」の中で、陸羽は次のように言っている。「茶の効用は、味が至って寒①であるから、行い精れ俟②の徳のある人の飲むのにもっともふさわしい。もし熱がでてのどが渴き、凝悶（氣鬱）になり、頭痛がし、目が渋き、手足が煩み、百節が舒びやかでないときに、まあ四、五杯も啜めば、醍醐③や甘露④と抗衡うような味がする。」³⁾



茶

ツバキ科の常緑樹。10～11月頃白い花をつける。
(平凡社「世界百科事典」)



茶経

唐代の文人・陸羽の著。広徳2年(764)頃に成った世界最古の茶論書。喫茶の普及に伴い、多くの異本が出たが、宋の陳師道が諸本を校合して出版したのが、版本としては最古のものである。
(淡交社「図録茶道史」)

3)「中国の茶書—茶経」布目潮風・中村喬編訳(平凡社 東洋文庫289)

- ①寒 本草(薬学)用語。沈静に薬効がある。
- ②俟 つづましやかで控えめ。
- ③醍醐 仏教用語。味のうち最高のもの。
- ④甘露 仏教用語。天人の食べる蜜のようにうまいもの。長寿・不死の薬。

つまり、茶は心身を沈静にし修養に効果があり、渇きや頭痛、目や手足の疲れを癒してくれるというのである。

また「茶経」の巻下「茶之記事」は、陸羽以前の書物の中で茶のことに触れた記事を抜き書きしたものであるが、この中にも茶の効用について述べた箇所があるので拾ってみる。

「茶茗は久しく服むと、人に力をつけ、気分を悦しくさせる」——神農（中国古代伝説の帝王、医祖）の「食経」

「それを飲めば酒を醒まし、人を眠らせない」——「広雅」（北魏の張揖の撰）

「苦茶は久しく食すると氣力を益す」——華佗（後漢末から三国時代魏にかけての名医）の「食論」

「瘠瘡に効き、小便を利くし、痰、渇き、熱を去り、人を睡らせず、秋にこれを採む。その苦みは、氣をおちつけ、消化をよくする。」——「本草」（中国の薬学書）の木部

以上、「茶経」と「茶経」以前の中国の書物に見られる茶の効用である。次にわが国の茶書では、まず栄西禅師の「喫茶養生記」の冒頭にある「茶は養生の仙薬なり。延命の妙術なり。」が挙げられよう。即ち栄西は同記上巻「五臓和合門」で言う。人間の五臓一肝臓、肺臓、心臓、脾臓、腎臓は、各々酸味、辛味、苦味、甘味、鹹味（塩味）を好む。この中、人はよく酸・辛・甘・鹹の四味を摂取するが、苦味は恒に無いので取らない。故に心臓が弱くなって病むのである。心臓は五臓の君子で、心臓がよければ他の臓もよくなるので、よろしく大陸の風習にならない、茶の苦味を摂取して心臓を強健にすべきである、と説くのである。

この栄西禅師に次いで茶の功德を説き、喫茶の普及に貢献したのが、京都高山寺の開祖明恵上人である。明恵上人は茶の十徳と称し、10の茶の効能を茶釜に鑄付けたという。十徳とは、散鬱氣、覚睡氣、養生氣、除病氣、制礼、表敬、修身、雅心、行道である。中でも明恵上人は、禅の修業を積む上で防げとなる三つの毒、即ち睡魔、雑念、座相不正のうち、睡魔を払い行道の資とするため喫茶を奨励した。

さて、以上の茶の効用を要約してみると、身体的には消化を助け、心臓を強くし、疲労を回復させ、渇きや頭痛などの病を癒す。精神的には鬱氣を晴らし、意志を強め、心身を爽快にして睡氣を払うという薬用（医薬）としての茶の効用である。また睡魔を払うところから禅林における修業の資としての効用があげられている。

次いでわが国では、中世的な道と結びついて精神的効用が生じ、仏道との関係において、人間の生き方や心の持ち方を教える宗教的効用があったことを忘れてはならないであろう。

しかし、喫茶には単に薬用という実用的効用、行道の資としての実際の効用、更に精神的或は宗教的効用があるばかりではない。宋の徽宗皇帝（1082～1135）の茶論と伝えられる「大観茶論」には、もっと違った茶の効用が述べられている。要約すれば、飢えには穀物、寒さには

絲、泉が騒乱の時代と言えども欠くことができないが、茶は泰平の世においてのみ、そのさわやかさ清潔さ、高く静かな韻致が味わわれる。清々しく和やかな気分をもたらす茶は、まことに盛世の風雅な趣きというべきである、というのである。つまり茶は、衣食のように生活に欠かせないものというより、衣食足りた平和な世にあって高い風趣をもたらし、生活を豊かにしてくれるもの、というのである。まさにこれこそ今日我々のいう文化である。

またわが国で南北朝から室町中期にかけて流行した闘茶という遊芸も、大変文化的な集りであったといえる。先進国の宋・元から舶載された珍しい絵画や唐物茶道具を飾って鑑賞し、一同楽しみ和合する。飲茶のために会合するこの「茶寄合」は、一種の文化的サロンであった。そして医薬の進んだ今日、茶は薬用としてよりも、はるかに徽宗皇帝のいう風雅のためにあると言えよう。

日常生活の中に最も快適な空間と時間をつくり出す茶室と茶会。しばしの間喫茶を楽しむ快い場には、人間らしい文化がある。

Ⅲ 茶の湯の歴史

1. 茶の湯以前

(1) 唐風喫茶法・団茶の伝来

中国に起った喫茶の風習が、何時頃誰によってわが国に伝えられたのか。文献上確かなものとしては、平安初期の勅撰歴史書「日本後紀」(841年)に見られ、平安初期の入唐帰朝僧たちによってであることが、ほぼ間違いないとされている。

しかし「茶経」によれば、中国では既に唐代(618~907)において、越州窯の青瓷、邢州の白瓷などを用い、喫茶の風がかなり普及しており、630年から894年まで度々派遣された遣唐使(15回渡海)や、754年に来朝した唐の高僧鑑真和上などを通じ、茶の日本上陸はもう少し早いと考えることもできる。必ずしも史料的价值が高い書物でなく伝承の域を出ないとされるが、『東大寺要略』に「聖武の朝、行基茶を植う」とか、『奥儀抄』には、729年(天平元)4月、聖武天皇が禁中に百僧を召して大般若経を講じさせた後、茶を賜ったという記事があり、奈良時代から頻繁にあった大陸との往来の中で、茶が普及し根付いたかどうかは別として、上陸したとしても不思議ではない。

さてしかし、確実な資料として先の「日本後紀」に記載されたところによると、815年(弘仁6)4月22日の条に、嵯峨天皇が近江韓崎^{から}に行幸された折、梵釈寺の大僧都永忠が天皇一行の詩宴の後、「手自ら茶を煎じて奉御」したとある。永忠(743~816)は宝亀年間(770~780)の遣唐船で入唐、在唐すること約30年。805年(延暦24)63歳の時、帰国、勅命によって近江

梵釈寺に入った僧で、村井康彦氏は著書「茶の文化史」の中で、永忠こそわが国の茶の歴史の第一ページに登場すべき人物と述べている。ところで永忠が嵯峨天皇に茶を差し上げたのは、永忠と最澄⁴⁾と一緒に帰朝した年からちょうど10年後のことであった。これは茶種から芽が出、茶の葉を摘めるようになるのがおよそ3年～5年、よい茶が取れるようになるのに10年かかるという自然の理に適っている。それはともかく、長い在唐生活の中で、永忠は茶を飲む風習を十分身につけていたと思われ、彼ら入唐帰朝僧によって、喫茶の風と茶の栽培がはじめられたのは間違いないと思われる。

そして唐朝文化の影響が強かった9世紀前半、嵯峨天皇の時代に、宮廷貴族の間を中心に、唐風趣味の一つとして喫茶の風が昂揚したと考えられる。この頃編された勅撰漢詩集「凌雲集」(814年)「文華秀麗集」(818年)「経国集」(827年)には、茶をうたった漢詩が数多くある。嵯峨天皇は梵釈寺で永忠が点てた茶を飲んでから2カ月後、畿内、近江、丹波、播磨などの諸国に茶を植えることを命じている。また宮中御苑でも茶園が作られ、嵯峨天皇の没(842年)後、急速に唐風趣味と喫茶の風が衰えたにもかかわらず、平安時代末期まで大内裏茶園と造茶所は機能していたことがうかがわれる⁵⁾。その大内裏茶園で栽培され造茶所で作られた茶は宮中で春秋二季に催される仏教行事「季御読経」^{きの み どきよう}で用いられた。「季御読経」は東大寺をはじめとする諸寺から百僧が参集、読経するもので、この時「引茶(ひきちゃ)」と呼ばれ、衆僧へ茶がふるまわれた。長時間の法会に従事する衆僧の疲労を癒すためであったと思われる。

ところで、この平安時代の初め入唐帰朝僧によって伝えられた唐風喫茶法は、団茶^{だん}(淹茶)と呼ばれ、「茶経」によれば、茶の葉を蒸して杵と臼で搗き、団子にして乾燥させ保存する。茶を飲む時は、団茶を^{あぶ}焙り適宜削って木製の碾^{ひき}(葉研)で粉末にし、釜の湯の中へ入れて煮淹^{にだ}し、好みによって塩、甘葛^{あまづら}、しょうが等甘味や香味あるものを加えて飲むというものであった。

(2) 宋風喫茶法・抹茶の伝来

唐風喫茶法・団茶が伝えられて約400年後の鎌倉時代の初め、日本臨済宗の開祖栄西禅師が、二度目の入宋を果たし、在宋4年後の1191年(建久2)7月帰国した時、宋で流行していた宋風喫茶法、抹茶を伝えたという。抹茶は碾茶^{ひき}とも言い、精製した茶の葉を茶臼で挽いて粉末にし、茶碗に入れて湯を注ぎ、茶筌でかきまわして飲む。これは今日の茶道の抹茶と同じである。栄西は肥前平戸島に上陸、ここに宋から持ち帰った茶を植えた^と伝えられ、今日富春園という

4) 最澄は805年永忠と一緒に帰朝、比叡山の麓の近江坂本に、唐から持ち帰った茶の樹を植え、それが「日吉茶園」のはじまりと伝える。

5) 995年(長徳元)の藤原行成の日記「権記」に、「造茶所」で今年造った茶の諸経費を書きあげた書類について記されている。

小茶園とその下方に栄西座禅石と称されるものがあるという。さらに栄西は筑前の石上坊^{いわかみぼう}（石上苑という茶園ができた）、博多の聖福寺境内にも茶を植えたという。しかし栄西の茶の湯史上における大きな業績は、「喫茶養生記」によって喫茶の功德を説き、その普及に尽力したことであろう。

鎌倉幕府の事績を記した史書「吾妻鏡」によれば、1214年（建保2）三代将軍源実朝が深酒がもとで病を得た時、栄西が良薬と称し茶一盞と、「茶の徳を嘗むる書」こと「喫茶養生記」（2巻）を献じたという。栄西は帰朝後、初め京都建仁寺に住し、のち源頼朝の後室北条政子に招かれて鎌倉の寿福寺の開山となり、その時鎌倉にあった。抹茶を飲んだ将軍はたちまち酔余の悪気が治り、感悦に及んだというのである。

この栄西について禅と茶を学んだ明恵上人（華嚴宗を復興した名僧）は、茶子^{ちやのみ}5粒を入れた茶壺⁶を栄西から与えられ、これを梅尾^{うめのお}の深瀬に植えたところ地味に適し良種の茶が出来た。これが「梅尾の茶」の起源で、中世を通じ名茶の第一に推され、当時流行していた闘茶会で他所産の非茶に対し本茶と呼ばれて区別された。

かくて宋風喫茶法・抹茶は新来の妙薬として、また行道の資として、寺院を中心に広まて行くのであるが、さらに律宗の僧で西大寺の再興を図った叡尊とその弟子忍性は、茶を慈善救済のために活用した。叡尊は神仏に献茶の余服を大衆にふるまい、衆生の教化に役立てた。忍性は鎌倉の極楽寺境内に療病、施薬、悲田、福田の四院を設け、貧者や疾病者の救護につとめたが、薬用として盛んに抹茶を作り施与したことが、極楽寺の子院、吉祥院に残る「千服茶臼」という大きな茶臼からうかがわれる。

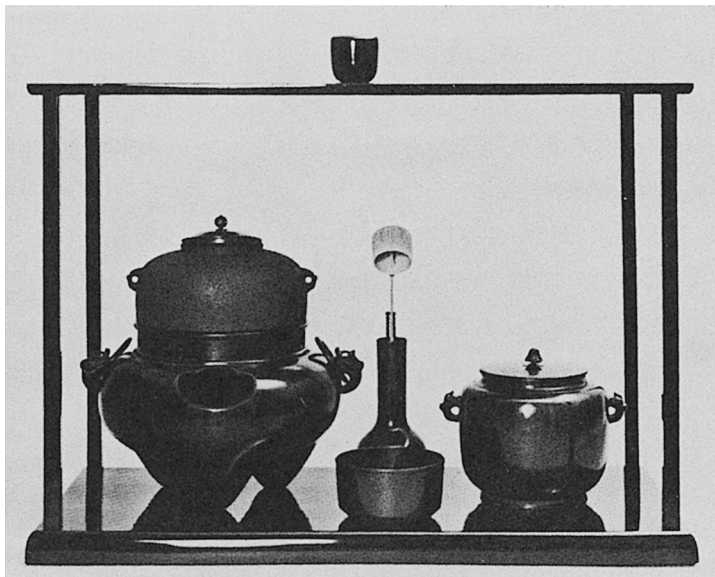
一方、鎌倉末期、宋代に行われた闘茶という遊芸が伝えられ、上流武家社会において流行した。これは喫茶趣味を持つ人々が一座に会し、梅尾の茶（本茶）とその他の産地の茶（非茶）を飲み分け、勝負をするという新しい遊びである。4種の茶を10服するのが基本で、多種の茶を飲んで、本非をもっとも多く当てた者は賭物（景品）が与えられる。賭物は扇、香宮、茶盃などから染物、小袖、砂金、鎧など様々で、勝負が終った後、珍味佳肴で酒宴がはられた。闘茶会は、南北朝から室町中期の東山時代にかけて上流武家社会で全盛したが、その闘茶会の大立者として佐々木道誉が知られる。道誉は近江の豪族で、鎌倉・室町幕府に仕え要職についた守護大名であった。和歌、連歌、猿楽、聞香を嗜み、闘茶に耽った。また唐物茶器の目利きに長け、南支の薬壺、香油入れなどを茶道具に取り入れたり、書院飾りを考案するなど、その見識と創意は、茶の湯の歴史的展開を早めるのに、大きな貢献をしたと言われる。

6)「漢の柿形の茶壺」と呼ばれ、今日寺宝として高山寺に伝えられている。

2. 茶の湯の成立

室町初期，茶寄合と呼ばれた舶来の豪華猥雑な闘茶は，次第にわが国の風土や習慣，歌合せや連歌会などの伝統遊芸の影響を受けて和様化して行った。茶室に掛ける唐絵は，仏画から風雅な山水花鳥を描く水墨画に変わり，唐物茶器の中でも日本趣味の姿形，景色のものが好まれるようになった。

この頃，北山文化の指導者であり，わが国の文化形成の推進者として知られる三代将軍足利義満は，茶の湯の成立にも大きな働きをした。義満は観阿弥・世阿弥を庇護し，能楽大成を支援する他，七夕の瓶花競争を奨励して立花の成立に寄与したが，また明との勘合貿易によって舶載された美術工芸品の中から，宋元の名画，青磁や天目の茶碗，香合，茶入などを蒐集，八代将軍義政の時集大成された「東山御物」の基を築いた。そして宇治茶園を作らせ，武家礼法を明文化⁷⁾させたが，これは茶道における礼式形成の基盤を成すものとなった。武家礼法は元来，唐代の名僧百丈禪師が唱えた「百丈清規^{しんぎ}」の礼式を基として成ったものである。「百丈清規」は，中国の禅林において禅僧が日常守るべき行いについて定めたもので，鎌倉末期に来朝し，これに精通した元の禅僧清拙から信州の豪族小笠原貞宗が伝習を受け，その禅林の日常茶飯の礼式を基に武家の礼法を編み出したのである。そしてその武家の礼法を取り入れて，室町中期，六代将軍義教と八代将軍義政の同朋衆であった能阿弥が，茶の点て方など茶儀を考案し



台子飾り（唐銅皆貝・真台子）

千利休所持一式，桃山時代。台子高66.0径86.0（表千家不審庵蔵）

7) 武家礼法を記す「三議一統大双紙」（12巻）を編纂させた。

たのである。

能阿弥(1397(応永4)～1471(文明3))は、もと越前朝倉氏の家臣で、中尾真能という。水墨画を好くし連歌に長じ立花に巧みで、和漢の書画・工芸の鑑識にすぐれ、義政の時、將軍家伝来の中国の美術品の中から上々の品を選び、「東山御物」の選定にあずかった。この中には今日国宝に指定されている徽宗筆「桃鳩図」や、牧谿筆「観音猿鶴図」などの名画が含まれていた。能阿弥はまた、闘茶の喫茶亭や会所⁸⁾の飾り方とは違う、武家の居間である書院の床や違い棚に茶道具を飾る書院飾りを立案、書院の茶事に用いる台子飾り⁹⁾を制定した。もともと禅院の献茶道具である台子は、鎌倉初期、筑前(博多)崇福寺の開山、南浦紹明禅師によって宋から持ち帰られ、京都大徳寺に伝えられていたのを夢想国師が献茶仏具として用いて世に知られるようになったが、能阿弥はこれを初めて書院の茶会の道具として用い、以後書院の茶の湯は台子を用いることが定められた。その他能阿弥は茶器の扱い方、置合わせの寸法(曲尺割)¹⁰⁾、絵画の表装を考案するなど茶道における形を整えたのである。

以上、室町中期、能阿弥によって整えられた茶の湯を東山流茶道という。東山流茶道は、闘茶に見られる社交的遊芸としての茶の湯と、禅院の厳粛な茶礼を合わせて形式を整えた、上流武家社会の茶の湯であった。

しかし、茶の形より茶の心を問題として真の茶道を起したのは、村田珠光である。珠光は茶の湯の開山、茶の湯の名人¹¹⁾と呼ばれる。

村田珠光(1423(応永30)～1502(文亀2))は奈良に生まれ、一時僧侶となったが茶の湯に志深く、上洛して能阿弥に立花と唐物鑑定法を学ぶ一方、大徳寺の一味和尚に参禅、印可を受け、仏法も茶の湯の中にありと「茶禅一味」の境地を悟った。そして30年来茶の湯に打ち込み、仏法のほか儒教も学び茶の湯における精神性を確立した。やがて能阿弥の推薦で義政の茶道師範をつとめ、京都六条堀川西に四畳半の数寄屋を構え、晩年は郷里奈良にも茶室独炉庵を設けて二都を往復し、多くの門弟に茶事を教授した。

珠光が茶の湯の形式より茶人の心に重きを置くことは、高弟古市澄胤に与えた茶道秘伝書にもっともよく示されている。即ち「此道第一わるき事は、心のがまむ(我慢)、がしゅう(我

8) 鎌倉時代に伝来した遊芸、闘茶の会場は、初め中国風に喫茶亭と呼ばれ、室町時代に入って闘茶の和様化とともに連歌の会所に習い会所と呼ばれるようになった。

9) 台子に茶道具を飾る方式。下板(地板)に風炉(左)、水指(右)、火箸・柄杓を入れた柄杓立と蓋置を入れた水翻(中)を飾り、上板(天板)に茶筌・茶巾・茶杓を仕込んだ茶碗と茶入を飾る。

10) 曲尺で寸法を割って(測って)、台子の寸法、床や畳の上に茶道具を置く位置などを定める。

11) ①目利きで茶の湯も上手、茶の湯の師匠として渡世する者を「茶の湯者」といい、胸の覚悟(志が深いこと)1、作分(目利き)1、手柄(唐物道具を所持)1の3条件がそろっている者を「数寄者」といい、「茶の湯の名人」は、目利きで茶の湯も上手、唐物茶道具を所持し、しかもこの道に志深い者をいう。



国宝「桃鳩図」徽宗筆

北宋時代大觀元年（1107），絹本着色一幅，28.6×26.0

北宋朝第8代徽宗皇帝26歳の作。室町時代三代義満以来蒐集され，八代義政の時集大成された「東山御物」であった。画面左下にある「天山」（朱文長方印）は足利義満の鑑蔵印。



重文「赤楽茶碗・銘無一物」長次郎作

桃山時代，高8.5×径11.2×高台径4.8（潁川美術館蔵）

執)也。……心の師とはなれ、心を師とせざれと、古人も云はれしなり。」といい、亭主と客が精神的に和合する一座建立を図ることに茶事の主眼を置いた。そして歌道の「冷え枯れた」「冷えやせた」句の姿から、茶道の侘た道具を説明し、和漢を問わず侘た道具をよしとした。また更に、珠光は名言「藁屋ニ名馬^{わらや} 繫^{つな}タルガヨシ^{かれ} (ト也)。然則、麁^{しかして}相ナル座敷ニ名物タルガ^{そそう}ヨシ、風体尚以面白キ也」によって、侘た草庵の茶室と名物道具の取り合せによって生じるさびた趣きをよしとした。

具体的には、書院の広間に代って数寄屋という四畳半の真の座敷(茶室)を生み出し、それと共に書院飾りを簡略化して数寄屋飾りを創案した。また書院の黒塗の台子に対し白木と竹の台子を作り、銀や象牙の茶杓に代る竹の茶杓を考えるなどわび道具を案出した。その他草庵の茶席にふさわしい軽々とした茶花をよしとするなど、珠光は上流武家社会の書院広間の東山流茶道に代って、庶民向きの数寄屋の茶法を創案したのである。茶の湯に精神性を加え、わび茶の心を形に表わした珠光の見識と創意によって、日本の茶道は名実とも成立したのである。この珠光の達成したわび茶を奈良流茶道と呼ぶ。

3. 茶の湯の大成

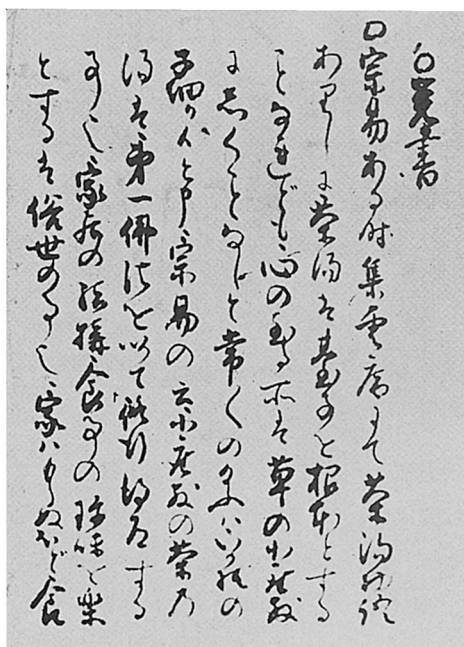
珠光のわび茶は、室町後期、堺の茶の湯の名人武野紹鷗によって、更に奥深いものとなった。武野紹鷗(1502(文亀2)～1552(弘治元))は、堺の富裕な武具の皮革業の二代目。24歳の時上洛し、和歌を三条西実隆に学び、30歳まで連歌師であった。また下京の藤田宗理、十四屋宗悟などについて珠光流茶道を修め、珠光のわび茶の奥儀を究めるとともに、新しい作意を凝らし、堺流茶道を開いた。紹鷗は三条西実隆に定家の歌論を聞き、伝統文芸として長い歴史を持つ歌道修得の極意を茶道にとり入れ、茶の湯大成に貢献した。即ち、新古今集の定家の一首「見わたせば花も紅葉もなかりけり、浦のとも屋の秋の夕ぐれ」こそ茶の湯のさびの境地であるとした。また、わび、さびの理念に基づき、紹鷗のすぐれた鑑識によって、南蛮物、信楽、備前などが茶道具として取り立てられたほか、四畳半の行の座敷(茶室)、袋棚¹²⁾、土風炉、竹の蓋置などわび茶に合う茶道具が創案された。紹鷗もまた晩年、堺南宗寺の大林宗套和尚より印可を受けており、連歌師心敬が連歌の極地を「枯カジケ寒カレ」と説いたように、茶道の極地は道具一種でわび数寄をするにある、と悟っている。これはまた財力にまかせ唐物名物茶器を数多く所持した末に到達した境地であったともいえよう。

さて、室町中期に成立した能阿弥の東山流茶道と、珠光の奈良流茶道を学び、茶の湯の形式と精神を合体させ、日本の茶道を大成したのは千利休である。

12) 珠光の白木と竹で作った台子を更に工夫し、台子の裾に襖付をこしらえることによって、柔らか味が加わった。

千利休（1522（大永2）～1591（天正19））は、堺の魚問屋で納屋衆の千与兵衛の長男として生まれ（幼名与四郎）、初め東山流茶道の数寄者北向道陳について茶の湯を習い、道陳の紹介で武野紹鷗に師事して珠光流のわび茶を学んだ。また珠光、紹鷗にならって大徳寺の笑嶺和尚に参禅、19歳の時、宗易と改名した。織田信長の茶頭¹³⁾となり、次いで秀吉に仕え知行三千石の茶頭となった。1585年（天正13）関白に登った秀吉が、禁裏の小御所で茶会を催し正親天皇に茶を献上した時、茶会の後見人をつとめた。この時利休居士の号を勅賜され、天下一の茶匠と言われたが、小田原の役で凱旋の後、大徳寺山門に自像を安置したことなどで罪に問われ¹⁴⁾、天正19年2月28日切腹した。

利休は珠光に始まった草庵茶席のわび趣向を進め、四畳半の草の座敷を完成した。新たに土壁、下地窓、^{にじり}蹴口、丸太の床柱、^{こも}孤天井などを工夫し、更に3畳台目、2畳、1畳半の極小茶室を造り、草庵の数寄屋を完成した。茶室に続く庭は露地と称され、手水鉢、飛石、腰垣、腰掛、待合、雪隠などが設けられ、跳木戸、中潜のある二重露地、三重露地などこまやかな趣向



南方録 覚書

利休の弟子南坊宗啓の記した茶道秘伝書。（福岡市・円覚寺所蔵）

13) 茶事を行う時のチーフ。

14) これは表向きの理由で、秘蔵の茶器を召し上げた秀吉に反抗したため、秀吉の朝鮮出兵に反対したため、茶器売買で巨利を得たと非難されたためなど多くの理由が挙げられている。

が凝らされた。茶道具では竹花入、楽茶碗、折^{おりため}撓茶杓、瓢たんの炭斗、竹の自在などを創案。ことに明の帰化人で瓦工であった長次郎を指導して焼かせた、手づくねのゆったりと柔かな肌ざわりをもつ赤楽や黒楽の茶碗は、利休のわび茶の心をもっともよく表わすものといわれている。今日、重要文化財に指定されている長次郎作「赤楽茶碗、銘無一物」「黒楽茶碗、銘大黒」などはその代表的なものとして知られる。また禅院の懷石料理をもとに一汁二菜の会席料理を作り、茶席の花は一色か二色軽く生けるのがよく、色や匂いの強い花などを禁花と定めた。

ところでさらに利休のわび茶を語るものとして、堺南宗寺の僧で利休の門弟であった南坊宗啓の書き残した茶道秘伝書「南方録」(文禄2年、7巻)がある。中でも1巻の覚書の冒頭で、利休のわび茶の真髓をうかがうことができる。

即ち「小座敷の茶の湯は、第一佛法を以て修行得道する事也。家居の結構、食事の珍味を楽とするは俗世の事也。家へもらぬほど、食事へ飢ぬほどにてたる事也。是佛の教、茶の湯の本意也。……」という。そして紹鷗がわび茶の心を、新古今集の定家の歌の心に見い出したのに対し、利休はさらに同集の藤原家隆の歌「花をのみ待らん人に山ざとの、雪間の草の春を見せばや」にわび茶の心を見い出している。紹鷗は定家の歌によって、花紅葉を眺め尽したのち、無一物の境界、浦のとまやにさびきった境地を見い出したが、利休はさらに、去年咲いた花も美しかった紅葉もことごとく雪が埋め尽して何も無いさびきった無一物の世界から、自然に感興が湧き、作為もなく真実なものが現われるとし、そこにわび茶の本心を見い出した。

このように利休に至ってわび茶の理念が確立され、同時にわび茶の心を表わす形式も完成された。ここに鎌倉時代の初め、栄西禅師によって伝えられた宋風喫茶法・抹茶は、400年の歳月を経て、わが国独自の茶の湯として大成されたのである。

IV 結 び

さて、茶の湯以前の唐風喫茶法が伝えられた平安時代初期からすれば、16世紀の茶道大成までおよそ7～800年をかけて、日本独特の茶道文化は醸成されたといえる。仏前の供茶^{くちや}、祖師への献茶、薬用、行道の資としての喫茶であったものが、単なる喫茶ではなく、精神的にも物質的にも衣食住に関わる深い内容を持った文化として形成された。茶の湯の形成にあたっては、日本古来の伝統的美意識が働いたことは、闘茶の和様化、唐物数寄から和物数寄の移行に見られるように当然と思われる。しかしまた、茶の湯の成立課程の中で、日本的美意識が深められ拡大されて行ったのも事実であろう。そこで茶の湯形成の中で生まれ、現代の我々の美意識に影響を与えている茶の美意識と、茶の美意識が生み出した生活造形について考察する本題に入りたいと思う。しかし茶の湯の美意識と造形を考察する前に、ちょうど応用問題をやる前に公

式を明らかにしておく必要があるように、それらを生み出した茶と茶の効用、茶の湯の歴史を明らかにしておいたのである。本稿を布石として次稿で茶と生活文化について論考したいと思う。

参 考 文 献

- 「茶の本」岡倉覚三著，岩波書店，1929年
「茶道古典全集」淡交社，1956年
「茶道辞典」桑田忠親編，東京堂出版，1956年
「日本茶道史」桑田忠親著，河原書店，1958年
「日本の茶書（東洋文庫201）」林屋辰三郎他編注，平凡社，1971年
「中国の茶書（東洋文庫289）」布目潮風・中村喬編訳，平凡社，1976年
「日本美術全集20・茶の美術」満岡忠成編，学習研究社，1978年
「茶の文化史」村井康彦著，岩波書店，1979年
「原色日本の美術23・陶芸(2)」相賀徹夫編，小学館，1980年
「茶の美術」林屋晴三他著，東京国立博物館，1980年
「千利休 茶の美学」成川武夫著，玉川大学出版部，1983年